

- 日 時：2020年6月21日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい。」
- 聖 書：旧約 ハバクク書 2：1-4（旧 p1465）
新約 ヨハネの手紙一 2：22-29（新 p442）
- 讃美歌：141「主よ、わが助けよ」536「み恵みを受けた今は」

お早うございます。

今日は、2020年度の立川教会定期総会の日です。

4月に行われる予定でしたが、新型コロナウイルスの問題で礼拝が出来なくなり、今日となりました。それでも、このように開催出来ることを心から神様に感謝したいと思います。

今朝の礼拝は、説教題として掲げた「教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい」との御言葉を、私たちがどのように理解し、受け止め、実践して行くのかをご一緒に考えたいと思います。

「教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい」とは、この手紙が書かれた紀元1世紀の後半、生まれて間もない原始キリスト教会に、早くも使徒たちの教えとは異なった教え、異端の教えが入り込み、教会を混乱に陥らせたことからヨハネによって記されました。主イエス・キリストを神の御子、救い主として信じる教えから逸脱し、私たちの罪の贖いであるキリストの十字架と復活を否定する考え方が教会に入り込んで来たのです。

キリスト教の歴史は、実はこのような異端との戦いの歴史でした。振り返りますと、今、私たちが信じているキリスト教信仰が確立するのは、4世紀の初め、325年、小アジア半島、現在のトルコのニカイアで行われた宗教会議においてです。この会議で、今私たちが信じているように、主イエス・キリストは全き神にして、全き人であるという信仰が確立しました。

それでは、この「キリストは全き神にして、全き人である」という信仰が確立するまでに、どのような異端との戦いがあったのでしょうか。

その第一はグノーシス主義と呼ばれるものとの戦いでした。

グノーシス主義とは、ひと言で言えば、人間に備わっている知識・理性で、父なる神、子なる神、聖霊なる神を理解出来るとするものです。つまり、人間の側で、神とはどのようなお方かを把握してしまうのです。そこには、詩編で繰り返し謳われているような、私たちの歴史を支配する創造主としての全地全能なる神、私たちの理解をはるかに超えた絶対者なる神は存在せず、神様を人間が理解出来る存在としてしまいます。又、この考えには、主イエス・キリストの贖いの十字架や、復活の信仰など存在しませんでした。そして、異端として退けられます。

第二は、このグノーシス主義と深く関わるのですが、キリスト仮現説と呼ばれるものでし

た。つまり、主イエス・キリストが神であるなら、全き善であるため、様々な誘惑を受ける悪なる肉体を取ることは出来ない。故に、受肉し、肉体を取って現れたキリストは仮の姿であると言うのです。あと一つ、神であるなら死ぬことも有り得ないとし、キリストの受肉も十字架の死も否定します。この考えも異端として退けられました。

今だからこそ、神様を私たちが頭で理解したり、主イエス・キリストの十字架の死と復活を否定するようなこれらの考えに与（くみ）する者はいませんが、このような異端が登場した時代は、当時の人々を惑わせ、少なからぬ影響を与えました。まさに、教会は、このような異端との戦いに苦しめられて来たのです。

私たちが毎主日唱和している使徒信条、これこそ全ての異端を退けて確立した私たちの信仰を告白するものです。この信条は、主イエス・キリストは、全き神にして全き人であり、十字架の贖いの死と復活の信仰を宣言します。4世紀以来、数千年にわたって全世界のキリスト者が唱和している信条です。その重さを噛みしめながら、改めてこの使徒信条を読みたいと思います。

「我は天地の創り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりて宿り、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架に付けられ、死にて葬られ、陰府に降り、3日目に死人の内より甦り、天に昇り、全能の父なる神の右に座し給えり。

かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審き給わん。

我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体の甦り、永遠の命を信ず。アーメン。」

この使徒信条を、「アーメン」「その通りです」と言うことこそ、今日のメッセージの主題に掲げた「教えられたとおり、御子の内にとどま」ることです。

ところで、今日の教会総会を迎えるにあたって、主題に掲げたこの御言葉と共に、もう一つ心に覚えたい聖書の言葉があります。それは、「御言葉を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」（テモテへの手紙二 4：2、1955年改訳）です。

マタイによる福音書に記されているイエス様の大宣教命令を思い起こすまでもなく、時が良くても悪くても福音を宣べ伝えることは、イエス様に会わしめられた全ての人、私たち一人ひとりに命ぜられていることです。そして、この職務に忠実である時、神様は、必ずその働きを支え、励まし、用いて下さいます。私が赴任して以降の4年間のこの教会の歩みは、そのことを余すところなく証ししています。

その証しの一つとして、先週の夕礼拝の事をお話ししたいと思います。

私が赴任した年の2016年5月22日から始まった夕礼拝は、この3月までで204回を数えました。出席者は、これまでで一番多かったのは10名ですが、通常3~5名で、私一人で守った時も2016年は1回、2017年はなく、2018年は2回、昨年は4回ありました。

夕礼拝を始めた理由は明らかです。もし1人でもこの礼拝を必要とする人がいるなら、その人のために教会の扉を開くためでした。

礼拝は午後7時から始まりますが、午後6時になると玄関と会堂の灯りをつけます。6時過ぎに来る人がいるからです。6時半になると、私はいつも通り教会前の道路に迎えに立ちます。6時50分会堂に戻り、講壇の椅子に座り、祈り始めます。

時間になり、夕礼拝の開始を告げました。しかし、先週は私以外誰も訪れませんでした。今日は一人で守るのかなと思いつつ、ヒンプレーヤーで前奏を始めました。前奏が終わり、目を開けると、何と最前列に一人座っているのです。A君です。昨年までは、ほとんど皆勤に近く親子で出席していたのですが、高校に入学してからは彼一人で教会に来るようになっていました。国立から電車に乗り、立川駅から徒歩で来るのです。

私は出席者が彼一人であったので、用意していた原稿から離れ、メッセージは「岩の上に建てた家と砂の上に建てた家」のたとえ話に切り替えました。A君がこうして礼拝に出席し、聖書の話しを聞いているのは、彼がこれから歩む人生で様々な困難に出会っても、崩れることのない土台を築くためであると語りかけました。A君は頷きながら聞いていました。

一人だけで守る夕礼拝と思っていたところに、神様はA君を招きました。

誰とも約束したわけでもなく、ただ一人で、夕暮れの街を距離のある国立の家からこの教会まで足を運びました。そして、神様は、私1人で守るはずであった礼拝に彼を招き入れたのです。「2人または3人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである」(マタイによる福音書18:20)との御言葉そのままにです。

2020年度、教会は2ヵ月遅れの出発になりますが、私たちは幾つもの新しい試みを行いたいと思っています。その一つは、先週の役員会で承認されたことで、毎月第4週の夕礼拝を青年の夕べにしたいと思いました。学生・青年向けの内容にするのです。なぜ青年の夕べを実現したいと思ったのかには理由があります。

この4年間、夕礼拝はほとんど2人の方によって守られて来ました。先ほど紹介したA君と父親です。特にお父様は、A君が体調が思わしくなく来れない時でも、ただ一人夕礼拝に出席しました。父親と私の2人で礼拝を守った時も何度もあります。今はA君以外に、もう一人高校生が教会を訪れるようになっています。

この若い2人のためのプログラム、それが青年の夕です。さらに、新しく1人の大学1年

生が立川教会を訪れたいと言ってくれています。そうであればなおのこと、3人の若い魂のために、まず来年3月まで、月の第4週の夕礼拝を青年の夕べに出来ればと願ったのです。

伝道とは、具体的な一人の隣りに関わることによって始まります。彼ら若い魂が、主イエス・キリストに出会うこと、そのために私たちに何が出来るのかです。

立川教会を訪れたいと言って来られた方が、高校生の時に書いた一文を紹介します。

「一人の少年の詩に想いを寄せて」（仮題）

少しだけ私の自己紹介をすると、私はのりを巻いていない塩おにぎりとスヌーピーを愛しています。

この頃出会った本について感じたことを話したいと思います。

それは『空が青いから白を選んだのです』という本です。この本には、今は取り壊されてしまって存在しない奈良少年刑務所の受刑者たちが書いた詩がのっています。彼らは20歳前後の若者で、殺人やレイプなどの重大事件をおこした人です。しかし犯罪をおこしてしまった原因というのは必ずあって、そこには家族や学校の環境・社会環境などが複雑に絡まっているのです。もし彼らに、一つでも助けになるなにかや、理解してくれる人がいたら、もしかしたらその犯罪に至らなくて済んだのかも知れません。そんな彼らのために奈良刑務所は「社会性涵養プログラム」というクラスをもうけて、そこで一度も耕されたことのない彼らの心の荒地を、芸術や文学に触れることによって豊かなものにしていくという企画を始めました。この本の著者 寮美千子さんは、そのプログラムの中で、「童話と詩」のクラスを担当していました。

彼女は彼らと絵本を読んだり、それを劇にしてみたりと、彼らが本当は小さいころに経験するはずだったことに、愛をこめて一緒にとりくみました。彼らの中にはドラッグを服用し続けてうまく話せない人や完全に心を閉ざしてしまっている人がいます。それでも皆で、本物の詩を読み合ったり、それについて意見を交換しあったりしているうちに心が開いて、隠されていた彼らの感性が輝き始めるのです。あるとき彼女は彼らに宿題を出しました。「なんでもいいから自分の詩を書いてごらん。もし思いつかなかったら好きな色についての詩でもいいよ」と。そこでの彼らの詩を集めたのがこの本なわけです。本当は全て紹介したいのですが、その中から特に心に残った詩とそれについての想いを伝えたいと思います。

「生きること」

生まれるためには 自分の両親

それまでの先祖 色々な人たちの命

無ければ 自分という人間は いなかった
感謝して 一生懸命生きなければならぬ
そして・・・
幸せになりたい

この子がどんな犯罪を犯してしまったのか、家庭環境はどうだったのかは分かりません。この子がこの詩を書くにいたるまでどんなにたくさんの涙を流して書いたのかを思わずにはいられません。自分の命に感謝できて、初めて人の命に感謝できるのだと思います。この詩はただ生命のつながっていく不思議を表現したものではないと私は思いました。私の感じたことはこの子の百分の一にもすぎないかもしれないけど、きっとこの子は自分の命が活かされているその奥にある、たくさんの人の愛・・・いやそれ以上の言葉に表せないものを体いっぱいにかんじたのだと思います。この詩の最後にある「幸せになりたい」という文は他より小さな文字でかかれていたそうです。その言葉の中につまる底しれない強い願いを感じずにはいられません。どうか幸せであってほしいです。

この本を読んだあと、すごく空が青く見えました。ふしぎと涙がでてきました。私は幸せとはなんだろうと思います。幸せってなんなんでしょう。でも言葉にできるものでもないような気もするのです。
(キリスト教愛真高校「夕会ノート」より)

夕礼拝は、出席者は少ないですが、昼間の礼拝にはない落ち着いた雰囲気があります。

それは、出席された皆さんが同じ感想を持っておられます。その雰囲気を大切にしつつ、このような新しい試みも少しずつ始めて行ければと思います。そして、「教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい」との戒めを守り、時が良くても悪くても福音を宣べ伝える私たちでありたいと思います。

祈りましょう。